

年間第 2 9 主日

第一朗読 出エジプト 17・8-13

第二朗読 二テモテ 3・14～4・2

福音朗読 ルカ 18・1-8

2022.10.16

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

肉食動物が、例えばライオンでもヒョウでも、草食動物の群れに襲い掛かるときには、大きなやつを倒した方がお肉がいっぱい採れるからって、鹿でもシマウマでも大きなのには襲い掛かりません。一番弱い子どもとか弱ったやつ、群れから外れそうになってるやつところに襲い掛かっていく。その方が倒しやすい。それは人間でもやっぱり、弱い人を踏みにじっていくっていうことがあるんじゃないのかな。

今日第一朗読で、イスラエルの民とアマレクっていう者たちの戦い、イスラエルは神様にお祈りして、最後にアマレクを打ち破ることができましたっていうお話が出てきます。旧約聖書は、一つの民族と一つの民族が戦いました、っていうだけだと意味が分からないでしょう。どうして神様が一方だけひいきして勝たせるのか、みたいな。だけど、そこに象徴的な意味がある。イスラエルの民はエジプトから脱出して旅をして来たでしょ。その旅で、だんだん付いていけなくなった弱い者たちが列の後ろの方に行っちゃった。アマレクはそこに襲い掛かってきて、後ろの方の人たちをみんな滅ぼした、と申命記に書いてある（申命記 25・17-18）。だからそういう意味で、アマレクっていうのは、弱肉強食、強いものが弱いものを踏みにじっていくっていうようなことの象徴なんですよ。

で、イスラエルの人たちっていうのは、エジプトで400年間奴隷でした。400年というのは聖書の数え方でやっぱり象徴的な時代だと思います。10世代、つまり徹底的に奴隷でしたが、神様によって助け出されるというお話が旧約聖書です。だから、強い者が弱い者を支配して自分の思うままに扱うという、そういうものは本当にもう嫌なんだというのが骨身にしみている人たちが、そういう社会から、昔は「社会」という言葉はなかったと思いますけど、社会から脱出してきているっていう、そういうひとたちなんです。

だから、片やアマレクっていうのは弱肉強食の象徴、で、イスラエルっていうのはそういう弱肉強食は嫌なんだっていう人たちの考え方の象徴、というものとして読まないといけないんです。

だけど、そういう弱肉強食は嫌だなと思って、そうじゃない国を造りましょうっていう者たちでも、簡単にアマレクに襲われちゃうっていう弱肉強食の状態に戻ってしまいますよ、っていうのが今日の第一朗読です。

モーセが神様にお祈りして手を上げている間はイスラエルが優勢、でも疲れてきて手が下がっちゃったらアマレクが優勢、っていうお話でした。でもそれは、ただ祈りの力とか、そういうものっていうより、つまりは神様に繋がっている間ならば弱肉強食じゃない、言い換えれば、今の教皇様の言葉を使えば「ケアの文化」、もっと簡単に言えば「助け合い」だよね、の社会になるけど、でも、神様を忘れちゃう、神様から離れて行っちゃったら、簡単に、そういうのは嫌だなあとと思っている人たちでも弱肉強食のほうに戻って行っちゃうんですよ、というような、だから、そういうものと戦っていかなきゃいけない、というふうに読み取ることができるんです、第一朗読のイスラエルとアマレクが戦いましたというお話は。後でもう一回読んでいただけたらいいと思います。

でも、モーセ一人じゃ神様と繋がれない。限界があるから二人の人に助けてもらいながらお祈りを続けました。それが、ある意味で神の民の出発点と言ってもいいような気がします。神様に繋がる、お祈りを続けるっていうのは、ただ儀式を執り行うとか、そういうことじゃなくて、人間が一番上じゃないんだ、自分たちの上には神様がいらっしゃるんだ、そして、お互い同士はもちろんのこと、いろんな造られたものすべてを、どんな人であっても自分のためだけに勝手に用いたり、あるいは他の人々を自分の道具のように扱ってはいけないんだということを、ほんとの意味での謙遜な心でずっと保つっていうのが、神様と繋がるっていうことの意味です。それをいつも思い起こすために、わたしたちだったらミサ、わたしたちの中に神様がいらっしゃるんだということを思い起こすっていうのがミサですね。この世界の中にそういう人たちが絶えず存在し続けなければ、この世はあっという間にアマレクだ、弱肉強食だということになります。

だから、受洗10周年を迎えた方をお迎えしてますけども、洗礼を受けるっていうのは、一人ひとりが神様と繋がるっていうだけじゃなくて、教会の一員になることで、すよって、たぶん入門講座で口を酸っぱくして言われたんじゃないかなと思います。それっていうのは、やっぱり一人ひとりじゃなくて、みんなで束になって、この世界には神様がいらっしゃるんだ、だから人間が王様じゃないんだ、自然でも人間でもお互い同士、強い者が自分勝手になんでも使っていいものじゃないんだ、ということをいつも、絶えず、わたしたちカトリック教会だったらミサを通して、自分たちにいつも確認すると同時に、世に対して示し続ける、それをみんなで協力してやっていくように神様に呼ばれたんだ、というのが洗礼だし、神の民に所属するっていうことです。

だから、今日の福音の中でイエス様が「絶えず祈らなければならない」(ルカ 18・1)と言っているのは、一人ひとりの個人的なお祈りももちろん神様との関係で大切なんだけど、むしろ神の民全体として、「社会がどんどん悪くなっていくように思うんですけど」って現代のわたしたちだって感じている面があるかもしれません、だけど、その中で気を落とさずに絶えず神様から託された使命として祈り続ける。祈り続けるっていうのは、ただ祈って頭の中で考えてるだけじゃなくて、その祈りから今度は一人ひとりの行動の呼び掛けが与えられるんだと思います。

だから、今日わたしたちは改めて、このごミサに集まって、そしてわたしたちの中にイエス様がいらっしゃるんだ、という恵みを確認します。それが、この日本社会に対して、そしてまた世界に対して、最近弱肉強食の色合いが強まってきているように思いますが、その中で神様がわたしたちの上にいらっしゃるって、すべては神様から託されてるんだと、お互い同士の命も、そしてこの被造物も、ということを証しし続ける、そういう神の民でありたいなあと改めて思います。

今日わたしたちの中にまたご自分の存在を与えてくださるイエス様が、一人ひとりの道を照らして、また教会全体、人類全体の道を照らしてくださる、その希望のうちにすべての人のためにこのごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>